

〔研究ノート〕

## 〈スピ・シン主義〉的な 個人の生き方を考える(1)

伊 田 広 行

### 要旨

日常生活の隅々にまで、スピリチュアルでシングル単位感覚溢れる姿勢で臨みたいと思う。それは、仕事と家事・家庭生活のバランスに加えて、何らかの社会貢献をすること、身体性の重視、脱「物語」の後の「物語」を生きること、「本当にやりたいこと」を大事にし、本当にしたいことと稼ぐことのバランスをみつけること、有名とか金儲けとかなどではない無名性の生き方、自由の確保のために自由を縛るものから離れること、所有しないこと、死んだ抽象でないような「大きな悩み」をもつこと、生活をアート視点で過ごすこと、時間へスローライフの視点で向かうこと、質素な生活をする事などを含む。

### 目 次

#### 1 総論

日常生活の質で闘う〈スピ・シン主義〉へ

総論：仕事も家事も社会貢献も、義務であり権利である

#### 2 やりたいことをやる

「身体性の重視」と「くたましい」重視の両方から「やりたいこと」を探す

脱近代の個人の生き方バランス：脱物語の後の「物語」

本当にしたいことと稼ぐこと

身のほど知らずに、自分の目標に向かってチャレンジ

スピリチュアルな人

自由の確保のために

死んだ抽象でないような「大きな悩み」をもとう

アートな生活

時間への向かい方：スローライフ  
 所有しない、質素な生活

……以上，本号

- 3 スピリチュアルな身体性
- 4 人間関係 ……次号（54巻1号）
- 5 こんなふうになりたい ……以下（54巻2号）
- 6 コミュニケーションと〈孤独〉
- 7 社会貢献

「みんなが正しい道を探さなきゃいけない。その道は目で見ることにはできないし、見つけにくい。誰も教えることはできない。みんな自分の道を自分で見つけなきゃいけないんだ。もし見つければ、その道は創造主のもとへ連れていってくれるだろう。」

（ユート族のメディスン・マン，チャーリー・ナイト氏の言葉）<sup>1)</sup>

## 1 総論

### 日常生活の質で闘う〈スピ・シン主義〉へ

〈スピリチュアル・シングル主義〉は、自分個人の生き方をどうしたらいいかという点、日常生活の質自体の向上という点にも、示唆を与えてくれる。

悔いなく、誇らしく満足できるものにしたいという視点で、かけがえのない自分の、一回だけの人生の生き方を模索しつづけて生きることが〈スピ・シン主義〉だ。安易にマニュアル化された回答はなく、問いつづけ模索しつづけるしかないのだが、悔いなく生きるために、一番大切なことは何か、どうやって生きていけばいいかということは考えた方がいい。

自分の生き方、精神のレベルはこの10年、20年、成長したかと考えること。ただ時間がすぎて、ただ生きてきて、精神のレベル、その実践を考えずに生きてきたのではないか。死ぬときに、満足できる人生だったと思えるか。その日、その日を楽しく、充実して生きてこられたか。他の人のために何か貢献できたか。そういう「問い」をもって生きることが、「善く生きる」ためには必要だ。

まず、「身のためにならんことを考えたりしたりするな」，「物事を深く考えるな」，「あえて不賛成を唱えるな」，「偉いさんの機嫌をそこねるな」というのが、今の日本

1) ウォール&アーデン [1997] 19ページ。

を覆っている処世術だ。自分にとって快適かつ安全なヒエラルキーというか、上下優劣・階段秩序を見つけて、その適当な席にちょこんと座ってずり落ちないようにしがみつくといいとおもわれている<sup>2)</sup>。そういう処世術からは距離をとりたいたいというのが——つまり従来の秩序への従属を拒否する価値観・自由観を持ちたいぜっていうロック・スピリットある生き方が——〈スピ・シン主義〉の精神である。んーん、かっこいい！

「人種差別や男女差別は私たちの熱意に関係なく続いていた。だから私たちはみんな現実と折り合って生活費を稼ぐことに専念しはじめた」というような、60、70年代の学生運動、公民権運動等の挫折経験者の「よくある諦め」から離脱したいと思う。理想をもったことが間違いだったんじゃなくて、その限界は、単純すぎたことである。一挙に理想的社会に変わるかのような希望のもち方（幻想）か、そうでないなら一挙に世俗化する居直りの生き方という単純な二分法は、あまりにも幼い。

それに対して、現代において僕（たち）が持つべきは、もうすこし先人の（失敗と成功の）経験から学んだ、成熟したオトナの発想だと思う。そこでは、上記したような、現実的にできる範囲での社会への関わりをしようという視点と同時に、日常生活を大切にすること自体（日常を未来社会の実現への“闘い”の場とすること）が重要なんじゃないのと考えられるわけ。日常生活での解放は、「自分の解放」の重要な要素だから。

こうも言える。身近な生活で、できることを考えるのは、解答が教科書に載っていない分、そこには創造性がある。「大きな話」は、「いいこと」のようで、自分の創造性がない。答えが与えられる。団体に加入すると決まりきっている。社会全体の変革のハードルは高く遠い。個人の個性が活かされにくい。だから、日ごろの生活の中でできることをするという、自分のできる範囲の「与えること」を実践してみることが重要なんじゃないか。周りがやばくなっても、抵抗できるだけの自分の足場をもつという、「自信のある自分」を作るといことが大事なんじゃないか。目に見えるわかりやすい社会的活動も大事だが、あらゆる人が不可欠にもつ日常生活、私生活

---

2) ル＝グウィン『所有せざる人々』にでてくるアナレス社会の一側面。「力が大手を振ってまかり通るようになる。権力と、その道具である暴力と、そして権力の最も親しい盟友であるところの見て見ぬふりをする目と」。ル＝グウィン[1986]331ページ。

の水準において、〈スピ・シン主義〉がにじみ出る様相を考えてみたい。

全体主義は、個人を全体に従わせる。僕は、全体主義に反発する“個”が集まった社会を望む。それは生き方全般に現れる。服装、話し方、考え方、セックス、働き方、友人関係、つながり方、すべての面において、秩序（国家、政府）から強制されないこと。強制されても抵抗すること、逃げること。そのためには、孤立を恐れない主体＝シングル単位人間となる。これが出発点。

じゃ、〈スピ・シン主義〉による日常の生活スタイルとはどんなことなのか。

### 総論：仕事も家事も社会貢献も、義務であり権利である

総論的にざっとまとめるなら、それは、これまでの社会の常識を信じて問題を昔のやり方で解決しようとするのではなく、人間とそうでないものとのつながり、世界の未規定性の問題などの「混沌の闇世界」領域の問題設定自体をまず理解して、世界への感じ方（そのひとつが地球環境に対する責任の概念）を変えて生きること。

その上で、長い時間軸、広い空間軸で思考して、シングル単位的な自己をキープしつつ、自己の領域を拡張し、自分の「囚われ」に深いレベルで気づき、自分のくぎりぎり）を見つめ、自分の繊細さや自分のカラダを愛し、自然を大切にし、自然を心身で味わうゆったりとした時間を持ち、環境保護の上でできることを行い、身近な人との「神話的な時間」を大切にし、社会的つながりを意識し、人に偉そうにせず、すぐに決めつけた反応をせず、相手を肯定的に静かに受け止め、ゆるやかに元気づけてあげられるカウンセリング・マインドをもって関わる、そういう総合としてのスピリチュアルかつシングル単位的生き方を日常生活に組み込むことである。

社会の一翼を担うのであるから、広義の仕事（労働、社会貢献）は、嫌（あるいはたいへん）だけれどもしなくてはならないものであり、そしてまた労働は権利である（時には楽しくやりがいもあるものである）として、生活の重要な要素として組み込むこと<sup>3)</sup>。NPOやボランティア活動も含めて、子どもや孫（世代）に誇れる、“私は

---

3) ル＝グウィン『所有せざる人々』にでてくるアナレス社会では、労働は当然の活動であった。そこには責任があったが、しかしすべて自発的であり、自由であった。逆にウラスではまったく責任がない。なにをしてもいい。自分で働かなくとも他人がやってくれる（169-170ページなど）。私は、アナレスのように、自分の人生の一定時間を社会維持と発展のために労働として提供することは当然のことと考える。

これをした”という「仕事」「生き方」をすること。少しでも次の世代の者たちが闘いやすくなるように、僕らの世代でできる範囲でおろかなことは減らしておくこと。

友人、恋人、夫婦、親子、家族のあり方としては、シングル単位的関係を明確に意識し実践することがこれからは重要だろう。親子のつながりも、恋人、夫婦、師弟関係も、偶然出会った見知らぬ人との関係も、みな、「役割」「ジェンダー」「損得」を離れて（忘れて）、友情・友愛・対等関係を基本に、身体性や感情やスピリチュアルな側面を総合して対応するということだ。動植物も含めて皆をかけがえのない人生の友人／伴侶と思うって感じ。

誰もが家事労働をし、収入労働をし、環境に悪いことを減らし（できれば環境にいいことをし）、他者の権利を侵害すること（抑圧、干渉、依存）を減らし、自分の生き方を通じて身近な領域に未来社会を先導るように実現しつつ、できれば他者／社会のためになることを増やすのである。他者／世界に対して非権力的・非暴力的になるってわけ<sup>4)</sup>。

「他者のため」といっても、自己犠牲ではなく、〈たましい〉のつながりにおいて捉えて、その人の喜ぶ顔を見ることが自分の元気になるとか、自分が世界に役立つという喜びにひたるという「新しい快樂」に気づいてそれを行うことである。

自己の解放ということも重視するので、「いい人になって、優等生的に生きる」とか「ちょっといい話」的道德主義者になるのではなく、自由にラジカルに創造的破壊を続けるアートの生活にすることでもある。「解き放す」ということが解放という事を

---

4) したがって、男性である僕がフェミニズムをすること／語ることに對して、僕自身に「違和感」はない。ときどき「男性がなぜフェミニズムを語るのか。男性は男性を語れ」といわれるが、これまでの各拙著や〈スピ・シン主義〉の主張全体が示しているように、僕は、男性も女性も語っている。そして男女という〈国境〉を超える営みとして、僕の心地よいフェミニズム、すなわちシングル単位論を語る。僕は、非権力的な方向に自分自身を運びたい。僕は、これまでも現在も、権力的・暴力的な人間である。女性に対して、また「弱い男性」や同性愛者や第三世界の人や動植物や自然に対して、つまり一言でいって自分（自己と一体化した共同体）以外に対して権力的である。だから、すこしずつでもそこを問題としたい。権力（男性性）を意識することで、他者と広い意味で「交流／ラブラブ」をしたいのであり、〈スピリチュアリティ〉水準で交流したいのだ。僕は自分の男性性を薄めていきたい。それが僕のフェミニズムである。

思い出すこと。その人の抑圧を取り除くことが「その人が変わる」ということなのだ。また、金や仕事や暴力や出世・名声といったことに対してちゃんと距離をもって冷めた目でみることである。金や時間に縛られるのはやめ、ずるい生き方もやめ、人に優しく、自分の人生を豊かにどっしりと善く生きる、ということである<sup>5)</sup>。

政治的には、社会民主主義的福祉国家路線を支持すること、したがって、必要な税の負担も負う代わりに、その使い道を民主的であるようにチェックするような国民になることである。

## 2 やりたいことをやる

「身体性の重視」と「くたましい」重視の両方から「やりたいこと」を探す

個人的な生活スタイルについて、もう少し詳しく述べていこう。

〈スピリチュアリティ〉を生活に生かすというとき、その2つの側面の両方を意識しておくことが必要。そのひとつは、知性でない領域、身体（からだ）や感情やスピリチュアルな水準などを含む「混沌の闇世界」の領域水準を大切にすることである。体を使ったコミュニケーション、アートの表現、チャレンジの重要性などがこれに対応する。

もうひとつが、身体性や感情でもないという、日常の感覚とは異なった別のチャンネルであるところの、より狭義の〈スピリチュアリティ〉だけをとくに重視するという側面である。この隠れたきれいな深いくたましいが見えることがまず必要であり、それに基づく生き方を日常で実践するという。権力性と鈍感さを減らし、やさしく、繊細に、つながりをみいだすような生き方。

簡単に前者を「身体性の重視」、後者を「くたましい重視」と呼ぶとすると、例えば、生き方を考えるときも、「身体性の重視」と「くたましい重視」の両側面から考えるということになる。「本当に自分のしたいことをする」ってよくいうが、それが見つからないというのが皆の悩み。では本当にしたいことって何？

---

5) 灰谷健次郎氏は、「物や金は一時の宝、人の心は一生の宝」と母にいられていたという。彼は、どんなに孤独を好む人でも人は一人ぼっちでは生きていけない。欲を抱え込んでわびしい人間になるな。人と繋がることはたやすいことではない。それをするのが人間で、そのつながりを創る営みが生きるということだという（「いのちまんだら」『朝日新聞』98年11月11日）。素朴だけれどいいこと言ってるんじゃない？

それを「身体性の重視」視点で体や感情に聞いてみる。ワクワク・ウキウキするようなこと。そしてさらに、自分なりの「たましい重視」視点で、したいことを追求してみる。シーンと心の奥で聞こえるようなもの。

やりたいことに出会うという至福は、そうした両側面の追求の結果から至れるものだろう。皆がそれに至るには、当然表面的な知性視点で「しなくっちゃ」と思っている常識から自ら離脱することが第一歩。その上で、何か受身でなく、自分が自分の1回きりの人生をプロデュースするのだという自由なアーティスト的能動性をもつことがある。そして、そういう姿勢をもつ中で、耳を澄ましていると、こころの奥底に隠れていた「やりたいこと」が何か“未来“からやってくるというような感じなのだともう。これがスピリチュアルな感覚。

これに関して、テツヤ（元ドリアン助川）さんが面白いことを言っている（『朝日新聞』2001年8月9日）。自分のやりたいことを見つけろといわれるがどうすればいいか、やりたいことが分からないという悩みに対して、次のように答えている。

彼自身、若いとき、何をしてどう生きていくのか考えた。自分が飛びぬけた才能・器量を持っていないと分かって、大学いったが、それでも見えないので、問いを変えた。何をしてどう生きていくかでなく、何をしててもいいから、どんなふうに生きていくのかというように。職業によって人生が決まるというのでなく、落ち込んでいる人がいたら、一緒に酒を飲む。目標・効率などのおぞましい言葉は自分の人生から除外する。日本人以外の友達をたくさんつくる。金魚やカメにもとりあえず話し掛ける。なるべく仕事はしない。といったような感じの100か条。こうするとラク、開き直れる、何をしててもいいと思える。自分なりの100か条をつくれれば、と。

いい答えだ。「どんな職業につくか」は、近代秩序や世間の目を気にした発想だし、ある職業に就いても状況によって違うとか働く内容や質で大きく変わってくるという意味で大雑把であまり内容のない考えだし、そもそもおもしろい通りの職業にも就けない。それに対し、彼の、「どんなふうに生きていくのかという100か条」は、今からでもできる現実的な視点だし、身体性と〈たましい〉重視の視点、すなわち、スピリチュアルな視点からの発想である。いくつもの「小さな自分の欲求」を具体的に書き並べていくというのは、自分の中の無意識を探求していき、囚われから自由になるための気付きの作業である。僕らがどう生きるかを考えるとき、何になるかでなく、どう生き

るかの具体的な100か条を考えるのは、参考になる。

### 脱近代の個人の生き方バランス：脱物語の後の「物語」

広い意味で「社会をよくすること」に各人は関わるべきであるとおもうけれど、仕事や生活で忙しいし、社会運動に関わってもすぐに成果は上がらず、しんどい。マジメな人がつぶれる。ここをどう考えて、どのようなバランスを提起するか。こんな歴史的段階で過去のマイナスのツケがあって、社会・経済・精神的に当面悪くなる一方の日本社会にあって、個人としてできることは何か。この大問題を僕はずっと考えつづけている。それで〈スピ・シン主義〉という。

4段階の手順を踏んで、その〈スピ・シン主義〉的バランスに至れるというのが、僕が今のところ考えていること。

まず、第1段階として、近代主義批判とか常識批判がいる。科学や近代社会に暗黙のうちに潜んでいるものの見方や考え方、発想の枠組み（パラダイム）を根底から疑う。「物語＝幻想性」を暴き、離脱する。道德主義的なできあいの価値（常識、社会的規範、慣習、倫理、自然、役割など）を前提にしない。信じ込まされていた“意味”が根拠なき価値観であると気付く。国民一丸のマニュアルや目標を与えてもらえて、個人が幸せになれるというような甘えた段階を卒業する。アイデンティティを、右翼的な民族・国民・血縁・家族や、旧左翼・労組的な仲間意識・連帯意識（階級、弱者、被抑圧者）におかない。よく言われる「人生の意味」といったダサイ教訓ものを捨てる。選択不能とされる自然共同体重視や自然回帰を批判する。近代パラダイムが妥当となる限定された範囲を意識する。

つまり、「信じていた価値の喪失」「意味なし」という絶望をいったん潜り抜ける。大きな「物語＝意味」への囚われから卒業し、相対化の視点を持ち、不透明になり、「社会の底」が抜けるということを知る。

次の第2段階は、第1の絶望（底が抜ける経験）を潜り抜けた上での自由を知るといふものである。すべては相対化され、自分を縛っていたくびきから解放されるのである。第1段階の相対化の承認は、実は、喪失であると同時に自由への扉だとわかる段階である。「私はどう生きればいいのか」という一般的な問いに、他人が答えられるわけがない。それは自分で見つけるものだ。一人一人が自分の生き方を選びとるこ

とができるという、自由への気づき。

第3段階は、その自由感の実際の形態としての、「強度」追求である。昔の「あるべき、信じ込まされていた根拠なき価値観としての“意味”」から離脱したなら、まずわかりやすく浮上するのは、理屈を越えて体や感情で感じる強烈な快感、すなわち「強度」である。それは具体的には、セックスやダンスやスポーツや趣味や家族愛や嫉妬心など、その人が主観的にハマる、身近な生活で身体水準で感じたり、すごく充実したりするものである。身体的主観的に思い込めれば一般的には何でもその対象になりうるのだが、どちらかといえば、大きな観念的物語（社会のためという大義名分）の反対に位置するので、小さな、身近な、脱社会的な、大義名分のない、身体性ある快樂という特徴があると思う<sup>6)</sup>。

そうした第1～第3段階の状態は間違いではない。それはポスト・モダン段階としては当然のことだ。その上で言うが、僕が求めるのは、それを踏まえた上での、再びの「物語」の感覚で生きるということ（意味と強度の総合としての自分の物語）である。それが脱物語の後の「物語」という第4段階の生き方。

その「物語」の中心が、〈スピリチュアリティ〉と「シングル単位」という概念である。様々なものの無根拠性を意識した上で、なお自分の選択として、〈たましい〉とか生態系全体のつながりへの覚醒というある種の「物語＝幻想」のパワーに注目するのである。これは単に第1段階以前に戻ることはない。ここでのつながりは、共同体主義のそれだけでなく、シングル単位人間の適度なつながりである。社会運動は、与えられた「真理・正論」とか「義務・すべきもの・禁欲主義的なもの」としてのそれだけでなく、自分の快樂を基準とした選択的価値としてのアクティビスト的な「市民運動」である。

そういう「幻想なんだ」という相対化の自覚があると、「正義や使命、義務」といった過度な思い入れというマイナスがなくなる。「しなくてはならない」という義務感から解放されつつ、社会性への自分のかかわりをもてる。第1から第3段階も踏まえつつ、ある程度の自分なりの社会性をもって、個人としてできることを楽しくアー

---

6) 宮台真司さんがいう「意味から強度へ」というのはこの第3段階の認識のこと。

ト的にする。そのバランスが、〈スピ・シン主義〉である。

### 本当にしたいことと稼ぐこと

そうはいつでも、「自分」とか「自分の本当にしたいこと」など曖昧である。「神からの使命」など、明確にあるわけじゃない。だからこそ、ここから、自分の自由、自分の人生を自分で作る自由さ、その自由であるが故の喜び、勇気というものがある。何をしてもいい！ 何をするかは私だ！ これが僕の言いたいこと。「スピリチュアリティ」だとか、精神世界とか、口先で抽象的に言うだけで、行動の自由とそれゆえの社会的責任ある実践へと議論をつなげないならば、それは反動（何もしないことへの言い訳）に過ぎない。

で、何をするか、だ。僕らの多くは、自分の〈たましい〉に自覚的でない。深く自尊心を持っていない。つまらぬ存在だと諦めさせられている。力を奪われている。したがって、アートなど関係ないと思っている。アートなどそんな悠長なこといつてられない、それよりも食わなあかん、お飯<sup>まんま</sup>や、仕事やというのが「現実だ」と。

でも、そうか。ホントにそうか。皆、よく、「現実」というが、ホントにそれだけか。苦勞して、まじめに、額にしわ寄せて、ケンカして、自分を殺して、頭下げて、どなって、泣いて、我慢して、汚いこともしかたがなくて、それが現実で、「楽しい」とか「やりがい」とか「創造的」とか「人のため」は「理想だ＝現実には無理だ」というのは本当か。

もう少し注意深く人々の生きざまをみてみたら、多くの人の生活や仕事は、カネだけではないことがわかる。義足をつくっている人は、義足をつけた人の笑顔がうれしいという。看護師や医者は患者の笑顔がうれしいという。教師は生徒の笑顔がうれしいという。商売人は客と話すのがうれしいという。仲間といっしょに苦勞して達成することがうれしいという。「うれしい」と、自分に「元気」が返ってくる。つまり、人のためは自分のため。禁欲主義でなく、自分のためは、人のため。

考えてみよう。思い出してみよう。「自分の〈たましい〉の呼び声に答えるような、本当にしたいこと＝A」のために、僕たちは生きているのではないのか。でも、それだけじゃ暮らしていけないから、多かれ少なかれ、「市場社会でカネを稼ぐ活動＝B」をする。当然、Bだけしているほうが、儲かる。経済的には効率がよい。しかし、B

を少なく、短くしている人がこの世には存在する。いっぱいいる。なぜなら、AのためのBであって、B自体が目的ではないから。食べるためだけに生きてるんじゃないから。お金自体が目的ではないから。生存することそれ自体が目的ではないから。生きている充実感、実感が必要だから。これが大切。あたりまえに、大切<sup>7)</sup>。つまり、僕らにとって何が大切かってこと。Aがあるかってこと。さて、あなたにAはある？ AのためにBをしているってことを忘れてない？ Bだけになってない？

Aがあることは、希望だ。だから元気が出る。だから「無理」なんかじゃない。我慢して、暗い顔して、やらなくっちゃって後ろ向きにいうんじゃない、もっとくたましいに自覚的になって、AとBのバランスを取り戻したいよね。Bのため自分を殺して頑張るのか、Aを追求して頑張るのか（Aも当然、たいへん苦勞する！<sup>8)</sup>）。同じ苦勞して頑張るなら、Aがあったほうがいい、Aの比重が大きい方がいいに決まってるじゃん<sup>9)</sup>。やりたくないことをやってる暇はないよ。

---

7) 根源的に大きく考えれば、今の日本で「当然」とされることをしなければいけないということはない。それしか生きていけないということはない。「お金や物質がないと生きてはいけない。お金、仕事、家族を求めるのが当然で、そうでないと普通でない、人間じゃない。無理してる」というのはまやかした。

人々の意識も変わってきている。生命保険文化センターの2002年「生活者の価値観に関する調査」によると、「多少の困難をとともっても、自分が楽しいと思うことを仕事としてやっていきたい」と考えている人の割合は70.4%もあり、96年の前回調査に比べ、3.1ポイント増加していた。一方で「仕事は単に金を稼ぐ手段にすぎない」と考える人の割合は1.8ポイント減少し、15.4%しかなかった。

8) 「自由」というのは、命令されず、しなくてはならないこともなく、明日がどうなるかもわからない。自分の責任で切り開いていかねばならない。「ルーティーンワークがある、しなければならぬことをが、命令される」ということがどれだけ楽なことか。休日が永遠に続くのは、飼いやられた人間にはとても怖いこと。

9) 労働・仕事は、禁欲か享樂かという議論は昔からなされてきた。近代社会では基本的に仕事と遊びや享樂を完全に分離したうえで、禁欲に基づく労働倫理を賛美する考えが主流であった。それを前提に訓練や管理の方法が発達してきた。管理の高度化のなかで、自己実現や目標達成・やりがいを管理手段に統合することも行われてきたが、本当に自分のしたいことや自由・享樂を追求すると、ある一定ラインで企業の管理目標と抵触するので、許される「自由」は予め決められた全体目標に合致する範囲内でしかなかった。しかし、本稿で考えている方向は、自分が本当にしたいこと・楽しみ（享樂・自由）であると同時にそれが、他者のためになるという道である。

Bだけのほうが僕にとってはよっぽど「無理」だ。でも、つい、忘れがちになる。僕も、この間、忙しさに追われて、先生らしく、学者らしくあれもこれもしなくっちゃ、あっちにもこっちにもちゃんとしなくっちゃと思って、なんかしぼんでたときがあった。

でも、拙稿 [2003 a] に書いたように、大学の先生なんか辞めてもいいんだっておもうと、元気が出たんだよね。これって、Aを思い出したってことじゃない？ これ、効果あるよ。

つまりね、アートっていうのは、そういうこと。原点に戻って、自分の〈たましい〉の声に耳を傾け、自分の人生をプロデュースして、再設計して、つくりなおして、その瞬間、その瞬間という即興性、人生の一回性を自覚してつくりつづけることなんだよ。そうすれば自由が目の前に広がる。つくるという喜びが目の前に広がる。友達との会話も、恋愛も、どんな仕事をどんな風にするかも、みんなアート。完全にマニュアルどおりなんてありえない。だから、みんな、アーティストなんだ。自分というものの、〈たましい〉というものが大事にできたとき、Bに追われがちな現代人もAを自覚するアートを楽しめる。自分には、ユニーク性があり、力があり、創造力があると、自分を信じれる人がアーティストなんだよね。

アートで食っていかねばならない、そのように売れなくてはアートでないと思う必要なんて全然ない。「私は……です」と、Aを思いだし、それに自分の人生の一瞬一瞬を繋げられる喜び、誇らしく自分の〈たましい〉を語れること、それに基づいて自分らしく即興的に選び作りつづけること。それがアートであり、大事なんだ。みみっちい「理性や理屈や世間や慣習や役割」といった“秩序”から自由になって、体とところ全体、結局は奥底の〈たましい〉によって溢れるように、毎日を、この瞬間を、自分の表現として創造すること！ そんな人が増えたらいいな。僕もそうなりたいな。だから、だから、あらゆる人がアーティストに！

### 身のほど知らずに、自分の目標に向かってチャレンジ

このように言うと、きれいごとを言うなという声が聞こえてきそうである。現実社会は厳しく、庶民はそこで一生懸命働いているんだ、と。生きがいか自分探しなんていう最近の甘っちょろいことと同じことをいうなど。

確かに現実のある面は次のようなことだろうと思う。多くの人が特別の才能もなく、

まじめに日々、黙々と働いている。特別の希望も、特別の失望もなく、小さな不満と喜びを抱えて。組織から離れる力もなく。工作上、客観的には、交換可能な、平凡な、能力、知識、仕事振り、性格、判断力である。本人もそう思って、あまり深く考えず、チャレンジも夢もなく、反社会的でもなく、おとなしく物質的価値観のなかで生きている。

で、だから、それでいいじゃないか、ぐっと夢とか希望を飲み込んで、身のほどを知って、不条理な現実を受け入れるのが大人だというのだろうか。僕はそうは思わない。

〈スピ・シン主義〉で言っているのは単純な「現実の反対を夢想する論」ではない。確かに現実には複雑で、「自分らしい人生を歩もう」などというヌルイ言葉だけで何とかなるようなもんじゃない。「世間のヤツらはバカばかりで、汚い、どうせ世の中変わらない」等と批判しているだけでも何も変わらない。他方、だからといって、現実社会に飲み込まれて、金や権力追求でなにが悪いと居直るのも、怠惰なだけで僕にはまったくつまらない。

〈スピ・シン主義〉はそのどちらでもなく、絶対の正義に立てるものなど誰もいないのだ、というところから出発し、その後にそれでも一回だけの人生を「よく生きたい」と思ったときに、具体的に自分の生き方に「変化をもたらす」ようなことを提唱している。それはけっして、今の社会に適応しろというようなもんじゃない。

グダグダいってるだけで、何もしない人は、現状肯定論者でしかない。〈スピ・シン主義〉は、広義の意味での「政治的・社会的」行動を提起する。そうでないようなものはスピリチュアルではないという。〈スピリチュアリティ〉は、社会に出て、現実の中で、他者とのコミュニケーションをとおして、実現させるものである。そのようなことを個人の生き方の変革ということに組み込もうとする。全体のつながりの中で、自分を捉え、自分にできることを考えるというスピリチュアルな社会性をもとうと提起する。

自分の深い部分での欲望・希望——それは拡大された「自己」の欲望＝〈たましい〉の発現——をとことん追求してみる。成功しないかもしれない。多分そうだろう。でもそれでいいじゃないか。それもまた豊かな人生である。たとえ不幸になっても身のほど知らずでも、いいじゃないか。他の奴がどういおうと、自分が満足できればよいのだ。

どんな職業か、どんな地位・肩書きか、収入がどれぐらいかは関係ない。どのように生きているかという質が問題。したいこととか自分の本心を見つめ、それに関われば、よい。大成功とか有名とか「とてつもない快樂」ということではなく、自己が満足できる、美しいまともな生活ができれば、その人は幸せ。

その実現のためには、24時間を支配しようとしてくる既存秩序に意識的に距離をとらねばならない。難しいが、できるだけ、あえて短時間労働のところを選び、スピリチュアルな生き方をしようとするエネルギーをそがれないようにすることが大事だ。上昇秩序に乗らないという意味では、半分、宗教的、修行者のようになって、組織や職場では少し腰が引けているぐらいがいい。

自分をごまかすことができる人とできない人がいる。逃げまくる人生をしたくない。僕は、追求したい。自分の気持ちいいことを。あなたはどうか。「足るを知る」とか「身のほどを知る」というのが流行りだが、現行の優劣秩序に対抗する視点を大事にしつつも、自分にとってチャレンジングなものを求めたいとおもう。高い目標をもって、自分を高めつづけることは楽しい。他の人を蹴落として幸せになろうと願うのではなく、今の自分を乗り越えて、幸せになろうとすること。比べ、超えるべきは自分なのである。

人は弱くなったときは休むことが必要である。競争秩序に取り込まれた人はそこからの離脱が大事だ。しかしどんな人にとっても「自尊心をもつ」ことは、大事だし、自分のしていることが何らかの意味で、誰かにとってよいとか社会的によいことと思えるとき、あるいは自分の目標にむかってチャレンジしているとき、その自尊心は成り立つ。

世間の秩序にあわす必要はない。だが自分なりの目標はぜったいにいる。上昇志向、能力主義でない、自分が納得できることをしたい。その基準は、人を蹴落とさない（弱肉強食ではない）ことと、スピリチュアルである（人に喜んでもらえる）ことであらう。

世間で、考えたらしんどい、問うてはならないとされている根源的な問いに向かうことは、僕にとっては、避けられないことだ。そこから逃げると僕の場合、かえってしんどい。それにストレートに素直に向かう方がとってラクで楽しい。受身的に、今の社会での安定にしがみつくと、元気がなくなる。どうなるかわからないからこそ

チャレンジしたい。そのチャレンジがアートである。

### スピリチュアルな人

スピリチュアルな人というのは、僕のイメージで言うと、特別に修行した有名な高い地位の人というようなものでなく、街のあちこちに時々見かけるような、穏やかな人であったり、静かな人であったり、子どもを愛している人であったり、病人に優しい看護師さんであったりする。本を読んで、深くその世界に浸る人であったりする。優しい目をして、腰が低くて、自己がしっかりあって、人をへんに甘えさせなくて、誠実な思いやりがあって、細やかでおおらかな人のイメージ。媚びず、自分らしく、自分のしたいことを自分のペースで、人と比較せず、自己肯定的に生きている人。

また、感覚が鋭い人やユニークな人も「普通の人たち」の中に多くいるが、彼・彼女らもスピリチュアルだと思う。今、ここで、僕がこんなことをしているということの不思議さ。ここでこのような風が吹き、このような会話を僕がしているということ。そうでないということがいくらかもある中での、無数の選択と偶然のこの結果。それを感じる力。味わい慈しむ力。また、今の社会や制度が当然としていることを「何で？」と思う人。自分のいる場所で静かに異を唱える人。そういうことを感じる人が僕の友人には何人もいる。「やりたいことをして生きる」というとき、そのような身近なイメージで捉えれば、それが遠い目標でないことがわかる。

スピリチュアルであるかどうかは、お金への向かい方に典型的に出る。いい加減な精神世界系の論は、お金儲けを肯定し、それどころか、その主張の説得性の証拠として、願っていれば成功するというような文脈で、金儲けや出世、成功を賛美する<sup>10)</sup>。そうやって、自説へ、貨幣の魅力で釣っているのである。「お金のことをいうのが本音だよな」というレベルが世の中にはびこっているときに、「お金じゃない」とちゃんと言うのは難しい。

だがまもとな論は、やはり「お金じゃない」というだろう。お金の使い方に意識的

---

10) 「先立つものはお金である、お金を稼ぐことが出来なければ心を豊かにもつことも何もできない、経済基盤をしっかりと固めてからこころを磨くべきだ」というような俗論を、「正直な本音だ」として支持するものが多い。その上で金儲けをさせてくれた「神様」に感謝して、お布施など感謝のバックペイを差し出せというのである。

である必要をいうだろう。預金しても何のために預金しているのかを考える。お金は現代においてもっとも中心的権力であるがゆえに、その人の無意識を投影するものとみることができる。口先でいろいろ言いながらも、金に執着する人は多い。〈スピ・シン主義〉は、基本的に「少ない収入で生きる」ことの大切さをいいたいと思う。

ただし、このことは、「お金のことを考えるのは汚いこと」「お金のことで権利を主張するのははしたないこと」というようなことではない。そういう潔癖主義は、現実的な権利の擁護、自尊心の回復の運動をみていない観念論である。金自体が目的ではないが、ひどい相手がいやがるような形で敗北を受け入れさせる形として金銭解決が有効なときがある。現実の運動をすすめる上で金銭が大事なことがある。自分の自由のためにも経済的な一定の保障が必要なことがある。それを押さえた上で、やはり「お金じゃない」といいたいと思う。

#### 自由の確保のために

個人が古い社会秩序に依然として絡めとられ、共同体主義的なものに同調を強いられているなかで、簡単にそうした社会秩序とくに「市場社会でカネを稼ぐ活動=B」から逃れることはできない。一挙にシングル単位という理想社会にもならない。そこで、既存の社会秩序の中で、仕方なくしなければならないのBの時間を減らし、一つの企業や共同体にどっぷり取り込まれないように、様々な側面をもって多元的に生きるとか、逸脱するというゲリラ的な抵抗の仕方をするのが、現実的にできることのひとつであろう。

そもそも自由とは、自分の内面から自分を縛っているものを解き放つときに得られるものだ。いままであまりに、会社とか地位やマジメな組織人という像にしがみつき、安定を求めすぎて、柔軟性がない人が多かった。自由を縛るのはそうした自己だ。安定性を期待して流動状況に慌てるのでなく、流動性を覚悟し、それを常態として柔軟に生きればいい。確定・固定した自分でなく、時代や社会が求める像そのものでもなく、大きな社会がどうであろうと自分はそこからズレてやるという、「個人の領域」(大きな社会からは見落とされる、小さな隙間の領域)に視点を置いた自由観である。

だからNPO活動のようなこともするが、短時間労働もして、自分のための楽しみの時間も確保して、多元化し、バランスで生きることが、大事だろう。結婚制度にも逸脱するように自由に生きる。一つの企業なり組織なり制度を正面や内部から

変えていくのはたいへんだから、変わりにくいところを変えることに力を割かず、よりマシなところへどんどん移動しつづけ、共同体主義の外側を生きるように逸脱してしまい、1回限りの人生を楽しむことである。そのほうがダメなところが変わる早道だし、社会全体が根本的に変わらなくても自分の自由は一定程度確保できる。

そうした自分の自由を確保する戦略のためには、「結婚当然、離婚・死別なし、病気なし、企業安定・長期雇用・年功賃金を前提として家を買って長期ローンを組む、子どもを2人作って塾など教育に力を割き大学まで行かせる、妻が正社員を辞めること」<sup>11)</sup>というのはあまりにもヤバすぎる。簡単に言えば、「結婚・子ども・家・専業主婦」の「購入」はとてもしス・クの高・い行動だと知ること。

もちろん子どもをもつとか家を所有するとか専業主婦になるということのプラスもある。だが、多くの人は、事前にプラス・マイナスを十分に考えた上で行動しているわけではない。このような損得で計算すること自体を否定する人も多い。だが、お金には計算できないことも含めて、プラス・マイナスを考えるのは、自己決定の基本だ。他人や社会が、機械的に「子どもや家をもつのはよいこと」と洗脳するということを相対化するために僕はこのように書いている。

子どもをもてば、子どもを先に失う悲しみのリスクとか、子どもの幸せにこころを砕き、子どもがぐれたり悪いことをして心を痛めるとか、自分が死んだあとのことに気を使わなければならないというマイナスもあれば、残された子どもは、そうした悲しみを通じて成長するというようにプラスに考えることもできる。何かを単純に言い切れるわけではない。子どもをもつという人生の豊かさは、子どもをもたずしては得られない。だが同じことは逆にも言えて、子どもをもたないという人生の豊かさは、子どもをもっては経験できない。だとすれば、確かに子どもをもたないことも選択の一つといえるだろう。

そういうことを押さえるならば、これからのゼロ成長社会日本において、「結婚・子ども・家・専業主婦の購入」を無思考にも勧める人は無責任である。ただ実際は、この4つをすでに「購入」した人も多いし、これからもそうそう減らないだろう。そ

---

11) 家をローンで買うと、3000万円以上で、支払い利子の累計も1000万円以上程度とかなりの額になり、子どもを大学まで行かせると養育費用は一人あたり2000万円ー4000万円程度になり、女性が正社員を辞めると生涯賃金は1億5千万円ほど失うことになる。

こで、この4つを購入した後でもどう生きるかを考えることも大切だ。結局、やり直しのできる人生のルートを作ること、複線化が大事ということだろう。どんな状況であろうとそれに応じて〈スピ・シン主義〉的に振舞う能力を培うこと。それが目指すことだ。

### 死んだ抽象でないような「大きな悩み」をもとう

見えている世界が狭いと思考も狭くなる。狭い思考枠組みに囚われていると、大きな解決策が見えなくて、狭い中で無用の労力を使ってつまらない「解決策」を探すことにへとへとになってしまい結局、解決されないから満足できなかつたり、エゴイスト的になってしまったりするという悪循環を繰り返す。「小さな悩み」に囚われて、それを大きな悩みとってしまうという愚かなことが起こってしまう。

だから〈スピ・シン主義〉は、「大きな悩みをもとう」と呼びかける。〈スピリチュアリティ〉とか「シングル単位」といった、「大きな物差し」を手に入れることで、近代主義とか自分の国、自分の会社、自分の家族・親戚・友人だけといった狭い「思考枠組み」での制限された悩みを、より意義のある、自分にとっての重大な悩みに高めたり、無用の悩みなら吹っ飛ばしたりしようという提案なのだ。人生は短く、一回限りで、使える労力はかぎられている。大事なことに時間を使いたい。「小さな悩みを大きくおもってしまう」のをやめるために、何が大事で、何が大事でないかを見極める力をもつための思想が〈スピ・シン主義〉だ。

ただしこのことが、過去の「男性たち」のように、「大きな物語」に囚われて、細部を軽視するというようなことになってはいけない。「大きな」「重大な」ということと、「小さな」ということは誰が決めるのか。そこにおいて、抽象的な、観念的な世界に逃げ込んだ愚かな歴史から学ばなくてはならない。ポスト・モダン水準をふまえなくてはならない。

〈たましい〉とか「全体性の一部というつながりの自覚」というからといって、これを単純に「宇宙全体が完全に調和のとれた単なる“ひとつのもの”となっている」とみてはいけない。個人の自由、偶然性、全体から切り離された個別性、矛盾した状況、立場や文化・歴史による相違などといった「多元的な世界」というのがリアリティある世界観であり、したがって予測不可能なことも多く、「すべてのことに意味が

ある」とか、「この試練も神様が準備してくださったもの」というような一面的なフィクションに囚われてはいけない。それが拙稿[1998]で巷に流行している精神世界論、新霊性運動的なものを批判した点の一つだ。

「人権論」とか「靈魂・魂」とか「神」,「仏」,「絶対的存在」,「超越者」,「全体性」とか「資本が悪い,市場が悪い,帝国主義が悪い,政権が悪い」とか,なんでも抽象的なものに還元してそれでことたれりと思っている人は「単純化の罠」にはまっている。それは死んだ抽象世界に生きることになる。多くの学者や活動家の論争というものにはそういう面がよくあった。昔のマルクス主義者にもそういうところがあった。これは「抽象性と具体性」,「理論と実践」の関係をどう捉えるか,「歴史における個人の役割」をどうみるか等という,昔から議論されてきた問題にも関わる点である。

単純な抽象的概念を本質だとして大事にして,目の前の個別性具体性を大事にしないということがよく行われている。起こっている問題とか相手の悩みとかを,常に自分の思う問題の表れとみて,解決策を同じところに流し込むということを多くの人はしている。そういう自分の認識の偏りへの無自覚,自分が科学的で正しいという思い込みこそ見直し,多元的な世界というようにみてこそ多様性概念を豊かに捉えられるというのが,〈スピ・シン主義〉の発想だ。

これは言うのは簡単だが,実践は難しい。本稿(僕)も含めて,何かを主張すること自体が常に「抽象的な結論への流し込み」の危険性をもっている。せめてその危険性に自覚的になって幅広い目配り・バランスを維持することに努めるしかない。

抽象的理論一般をいくら具体化しようとしても限界がある。「本質そのもの」「抽象概念そのもの」などなく,目の前の具体的な存在しかない。しかし,表面的に目に見えるものの奥に,見えにくいものがあるという気付きが,混沌の闇世界,身体性,スピリチュアル領域への目配りという主張になっている。この両者のバランスを正しくつかまえることが必要だ。

大切な点は,具体的対象の具体的把握のなかに,導きの糸としての理論を使うということであったり,自分のかかわりも入れて作り上げていくというアート視点を大事にするということであったりする。「アート視点」というとき,それは自分とその他のものとの化学反応であり,はじめからどこに至るかがわかっているような予定調和ではない。つまり理論どおりの結論に至るものではないということを含む。即興性具体性のなかに,〈スピ・シン主義〉が,独自のカタチで表れ出るのである。

したがって、個別性・具体性重視ということは、無秩序、無理論、無方向ということではなく、実は僕やあなたも含めて、大きな全体性の一部であることは間違いなく、大きな〈たましい〉の表れという面と統一的に理解されなくてはならない。具体的な問題に取り組む中で、実は問題そのものが、〈たましい〉という高い水準に関わる解決の方向性をもっているのであり、僕やあなたの主体的アートのなかかわりはそれを現前化するという関係にあると思う。つまり、死んだ抽象に還元せず、多元的な世界に具体的に関わって、高い水準に生きる、それが〈スピ・シン主義〉的な生き方である。

### アートな生活

アートな生活とはどんなものだろう？ アートな生活とは、一言で言うなら、通常の「常識」といわれる囚われから自由になるという意味での、アートのものの見方を探したり、日常生活と異なる次元の世界を見出しそれを表現することといえるだろう。

広義アートは、狭義の知性が見落とす、身体、感情、〈たましい〉の領域の表現である。皆が持ち上げる「家族や人間性」「所有すること、カネ」「国家、天皇」「普通の生活」「民主主義、人権、ヒューマニズム」「男女共同参画」「正義・自由・希望・夢」など近代主義的な「上層建築」を否定（創造的破壊）するような根源的な破壊と創造の試みの全体である。きれいごとでなく、非暴力、〈スピリチュアリティ〉、アナキズムを持ち上げつつ、身体性あるチャレンジをすることの全体である。「(簡単な)自由はないんだ」というリアルさの上に、「自由へ至りたい」と思うこと自体がアートだ。教えを説いたり、それに従うのではなく、否定・闘い・脱秩序の中で〈スピリチュアリティ〉を結果として浮かび上がらせる戦略的行為。単純なドロップアウトやアウトサイダー化ではなく——それは二元世界を維持するために結局現実の近代秩序を補完するだけになるのでだめ——、日常の微細な権力関係のなかに、それと対抗的なものを入れ込むという実践的な創造性の発露が、広義のアート。つまり創造的な生き方だと思う。

狭義のアートは、そうした視点で日常生活と異なる次元の世界（混沌の闇世界）を独特に凝縮された「ある種美しい」形で表現する行為とその作品のこと。バラバラの表面的な目に見えるものそのままという「凝縮性のないもの」ではなく、本質的なもの

の、あるいは深く隠れているなにかを「典型」として、デフォルメして描き出し、作り出し、作品化したものが、狭義のアート作品だ。

僕が〈スピ・シン主義〉で追求する実際のアートな生き方とは、そうした広義、狭義の両方を含んでいる概念である。どちらかでなくてはならないというのでなく、すべては無理だから、自分の生活の中に少しでもそうした創造的な活動を入れ込む生き方をしようという提案だ。

例えば、心身全体で自然や相手の気持ちや芸術作品のエネルギーを深く感じることで自体がアートだ<sup>12)</sup>。直接的な方がいいが間接的でもいいので、風を感じる、雨を感じる、肌で感じる、本や映画を味わうというように、集中した意識で、美しいものをみる、感動する、感じるということを意識的に生活に組み込む。すばらしい人や自然（空気、匂い）や童話や小説や音楽や絵や映画やその他スピリチュアル度の高いものに触れること<sup>13)</sup>、犬とか動物・植物と交流し、時間の流れ自体を味わう散歩をする。相手の言うことに心をこめて聴き、目を見つめ、安易に賛成や反対をせず、深く受け止める。旅やトレッキングやスポーツなど、心・体に気持ちいいことを意識性をもって行う。音楽や踊り（ダンス）など、身体性あるものを頭でなく体や心で感じる。

時間に追われることを減らし、起床と就寝の時間を大切に<sup>14)</sup>、1日の中で――そ

12) 僕の友人である森島明美さんが、ブラジルの楽器ピリンバウなど民族楽器演奏者の丸山祐一郎氏による「水カンリンバ」を紹介してくれた。彼は、空き缶に水を入れてつなげて作る手作り楽器「水カンリンバ」をつくりだし、その普及運動をすすめている。その音色は、「心の川」の音であり、私たちが忘れていたものを、つまり〈スピリチュアリティ〉のようなものを思い出させてくれる。僕は、森島さんが心を込めて作ってくれた水カンリンバの音を聞いて、ともすれば忘れそうになる「僕の求めているもの」を思い出す。

13) 「白人の町には、心を落ち着けられる場所がない。そこには、春になれば木々の葉がぐんぐんと広がっていく音だとか、昆虫の羽ずれの音などを聞ける場所がないからだ。……町の騒音は、耳を傷つけると思うのだが、どうなのだろう。……インディアンは、池の水面を、矢のように吹き抜けていく風の、やさしい響きが好きなのだ。またお天気雨に洗われた松の幹が放つ香りや、松の実の匂いの混じった、風の芳香が大好きだ。」シアトル族の首長（1786-1866）が語ったとされる言葉。ピクマル[96]32ページ。

14) 寝る前にここを集中して1日を振り返ること、何とか1日、幸せに生きられたこと（そうさせてくれた人）に感謝すること、朝、それを踏まえて、今日、したいことを

して人生の中で何度も——じっくりと静かにやすらかに自分の内部を“高い”地点から、あるいは対話的に、自分の奥深い部分の〈たましい〉を基準に、自分が自分を客観的に見つめる時間をもつことがアートな生活である。

創造の楽しさ（表現する楽しみ）を生活に組み込み、それを生きるエネルギーとして自覚すること。芸術作品を作って売る、人に読んでもらう文章を書くといった能動的で社会的に評価される分かりやすいものだけでなく、どこかに写真をとる旅行に行くとか、誰かと一緒にペンキを塗ったり、ご飯作ったり、買い物したり、自分のためだけに詩を書いたり、壁に絵を描いたり、家の中のものを自分で作っていたり、自分らしい家にしていく、というような日常生活の中にも創造的な営みは可能である<sup>15)</sup>。仕事についても、自分の仕事のなかに、創造的な部分や楽しい部分を見出すのがアートのである。実はコミュニケーションをとること、表情、振舞い、ファッション、生きるスタイル、すべて自分が作り出している選択の体系であり、ある種アートである。生き方や読んだ本や映画や仕事について、ゆっくりと深く哲学を語るように話をする時間を持ち、その中身・伝え方に気を配るのがアートである。

「考える」という行動も、それが既知のものを越えて、日ごろの自分を越えて、ときに何かはじけるようなつながりを通じて新しいもの（見たこともないもの）が生まれるとき、アートの行為であるといえる。想像力で、自分を鳥にする、虫にする、地上1000メートルや100年前に意識をもっていく、「樹木の時間」で話し、動き、生きてみる等々もありだ。

毎日、いろいろ想像・創造する生活（卑小から飛翔へ）<sup>16)</sup>。それは生命の不思議をいつも確認することだ。アートということは、想像力の目で現実を、別の水準——それは未来を胎動させるものでもある——からみつめるということである<sup>17)</sup>。

---

意識すること。

15) 金銭で高価なものを買そろえるとか、家族・友人関係など身近な集団のなかで、命令・「やらせる」とかバラバラ分業というのは、アートのでない。人が時間・空間を一緒にしてプロセスそのものを楽しむことがアート。

16) 拙著[1997]『樹木の時間』参照。

17) ファンタジーは、現実への、質を異にしたアプローチであり、それは自然主義文学に比べて、詩や狂気、神秘主義に近い、とル＝グウィンという。想像力によって、私たちは、現実というわれわれの世界の深遠なる次元での解明、理解、関わりがもてる。「理性ではないが、理性の対立物でもなく、理性の異性体」としての想像力である。

知性・知識・情報があることで、それに自分も囚われてしまい、スピリチュアルな感覚、「こころの目」を閉ざしてしまう場合が多い。俗っぽく言えば忙しさや情報に流されている。「そうですが……」といいつつ、何も行動しない、そしてすぐ忘れる、そういう人が多すぎる。そういう口先だけ反省して何も変えないような生き方を変えることこそが、アートな生き方。

アート（芸術）は、近代合理主義の狭い理性的把握、数字的効率の把握に対して、目に見えない領域、直感的身体的領域、周辺の領域で——すなわち「混沌の闇世界」「深層意識」領域で——生き生きと把握する、「身体に近い言語」である。その意味でのアートということをもっと身近にすること、皆がアーティストになること、これこそが、成熟社会における「目標」である。

アートは面白い。広義のアーティストになるということは、目指すべき目標だ。だが、そのためには、豊かな内面世界がいるのだ。人が高次化しなくてはならないのだ。「狭義アート」が先にあるのではない。

このアートについて、若桑みどり氏はいう。ミケランジェロが政治家であったように、普遍的な人間こそ、実は回りまわって現代が求めているアーティストの姿ではないか。社会との連携をたちきった人、ゲイジュツカはだめ。人間的なすべての事、地球上のすべてのことに関わる、痛みを持ち苦悩する、そのような芸術、アートがいる。狭いジャンルの「芸術」はだめ。専門化され、個別化され、疎外された芸術はだめ。すべてと関わる独りの人間でなくてはならない。芸術は総合的なものであり、知性と思想性があるのに、日本には職人的な無思想と傲慢さだけの奴が多すぎる、と。また次のようにも言う。歴史家は知っている。しかし芸術家はいつも創造の第1日から始める。神話を作り始めた瞬間に立っている、と<sup>18)</sup>。

そのとおりだと思うし、これを逆に言えば、あらゆる人が、知識をなぞるような生き方や、手に入らないものがあると自分が不完全であると思うようなことから離脱し、毎日を創造する日にするような生き方をする事、「アーティストのような総合性」を獲得することこそ、これからの目標といえるだろう。

---

ル＝グウィン[1992] 54ページ。

18) 若桑[1988]を要約した。

### 時間への向かい方：スローライフ

時間のスピードや密度を自分で意識的に変えてみることも有効だ。時間との関係性を変えて、時間や情報に追われるのではなく意識的に「今という私の時間」をゆっくりと味わうように時間に向かうことが大事だ。「喉の渇きをケロリとなおす丸薬で時間を週に53分儉約する代わりに、ぼくならどこかの泉の方へゆっくり歩いてゆくんだがなあ。」<sup>19)</sup>と星の王子様が言うように。

人生の時間配分として、仕事・収入のため・自分だけのためとか、家族だけのための時間を一部にして、それ以外の時間をもつこと。誰かのためになる時間を持つ。有効ではない、無駄な時間を味わうこと。

なぜ時間が速く経つのか。大きな原因の一つが情報が多すぎることだ。メール、インターネット、本、新聞、テレビ、雑誌。それによって時間がとられる。必要な情報というより、そうでないものが多い。情報の選択が必要だ。「時間を大事にする」とは、「テレビを見たり、バイトしたり、酒飲んだり、通勤の時間とかタバコをすったりする時間」をみつめなおし、不可避のようにスケジュールに入れていたり、有効な時間の使い方とおもっているが、それは本当に必要か、大事か、「時間をつぶしているだけじゃないか」という問いをもつことである。そのとき、スピリチュアルな時間という視点をもつと、考えやすい。

スピリチュアルな視点という観点から言うと、呼吸に意識を集中する時間を持つこと（自分の呼吸の浅さ・深さを自覚する）や「樹木の時間」を想像してみる時間<sup>20)</sup>もいいだろう。さらに何もしないようなゆったり・のんびりとした時間をつくることも

---

19) サン＝テグジュペリ [1953] 120-121ページ。

20) 拙著 [1997] を参照のこと。古木は100年も500年もそこに立って、ニンゲンたちの営みを見てきた。直接、人間に言葉をあたえるわけではないが、それが語りかけるものは、人間が人間だけの視点で、しかも今の時代の視点だけで生きることの愚かさ、その相対性である。時間の基準を、樹木に置けば、何と人間の行動や時間概念は、せせこましくあわただしいことだろう。また、樹木の生命活動は、動物のそれとは異なる。植物の間でも生命活動は多様である。食べるとか苦しいとか死ぬといった概念は、いかにも人間的である。ましてや、人間の二分法の多くは、統一的なものに虚の線引きをしただけである。陽子や原子レベルではみえないその総合的な生命の不可思議さ。生命というひとことこそが、全体であり、畏敬の対象である。

重要である。例えばル＝グウィンはいふ。「する」のではなく「ある」ということの時間がある。行動と行動の間の時間。「する」ということをやめて、ただ「ある」という、それだけでいられる時間、あるいは、自分とは結局のところ何者なのだろうと考える時間が必要である。人間は何をしても行為の結果から自由になれないものだ。それをわからず「する人生」がいいと思うのは若者の誤りである、と<sup>21)</sup>。

効率を重視して早くゴールに行くのでは、プロセス自体の楽しさが抜け落ちてしまう。一つ一つを楽しみ、立ち止まって耳を澄ますと全然違うものが感じられる。その一瞬はその時にしかない。感じようとしないと「見えない」ものである。当然、楽しい時間、体を動かす時間、マッサージの時間、親しい人と語り合う時間、自然に触れる時間<sup>22)</sup>、1日を振りかえる時間などを意識的につくることは有効である。生活のなかに、無駄があることを受け入れることである。無駄は、豊かさの友達である。複雑性の保障のためには、効率に反するいいかげんさが必要である。

山田太一脚本のTVドラマに『小さな駅で降りる』というのがある。リストラをすすめる卸会社の中の部長とその部下の2人は、しかたないと思って必死に働いている。そのとき、社長に手紙が送られる。それを送ったのは彼らの妻たちだった（これは後にわかる）。妻たちは言う。仕事をやめればいいと。2年休めばいいと。30、40歳台の2年の休みは、とても意味があると。だが、男たちは、意味がわからない。何をいうのか、無理にきまっている。仕事もある。再就職できない。家のローンもある。おまえたちは俺たちの仕事をそんなものと馬鹿にしていたのかと。だが、本当か。本当に、休めないか。妻たちは家出をしてまで訴えていく。徐々に男たちは自分たちが囚われていた幻想に気づいていく、というような話だ。

働き方を見直すということは根源的だ。活動家、学者、弁護士など、「がんばらない人生」「過労死しない社会」をつくろうといいながら、がんばって過労死しそうな

---

21) ル＝グウィン[1973]『ゲド戦記Ⅲ さいはての島へ』63ページ。

22) 自然に触れるといっても、四駆を走らせて文明の利器を何もかも持っていった場所を移動しただけのような「レジャー」は、そのスピリチュアル度がかなり低いというべきであろう。ル＝グウィンは、特別の私的な深遠な次元で、現実と交感するために、ただ一人、「中つ国」あるいは「エルフランド」を旅するような質と、文明人がセコンドハンドの現実（ラジオなど便利もの）をたずさえてトレーラーで「自然」を味わう旅の質は同じではないという。ル＝グウィン[1992]『夜の言葉』52ページ。

人が多いじゃないか。忙しい忙しいといっている。それを皆が誉める。頑張っている人は「エライ」と思うけど、新しいモデルの追及という点では考えきっていない証拠だ。また一方で、自分の狭い生活——結婚、子育て、仕事——に閉じこもっている人も多い。考えきっていない証拠だ。〈スピ・シン主義〉は、仕事を辞めるとか長期に休むことまで含めて、短く働く、働く以外の時間を大事にする、人生全体の時間配分ということをいつも視野に入れる。

### 所有しない、質素な生活

メディアから与えられた「欲望」（金銭、流行的商品、快楽、健康等）を基準に、それを手にできないこと（所有しないこと）がだめだと思い込む発想（それがなければ幸せになれるという発想）から離脱すること、モノの多さをふりかえり、シンプルで質素な、それでいてアート・創造性と快適さがある生活を心がけることをめざしたい。なんやかんや言っても、この世の中でもっとも力をもっているのは金である。だからこそ、その金の使い方をどうするか、本当に質素な生活を楽しんでできるかどうか、ホンモノかどうかの試金石である。

稼ぐことはしなければ仕方がないが、これからの仕事としては、「最大利益追求、金儲け」以外の目的をもつこと、とくに人のため、社会のためという公益性をもつこと、自分にとって楽しいものであること、仲間がいること、労働時間が短いこと、その仕事（スタイル）を長続きさせるために収入はそこそこの水準でいいからあること（赤字でなく利益を出すこと）などが条件だろう。

資源の過剰消費とゴミの大量廃棄にならないようにし、忙しくなく、豊かに生きるには、金のための「仕事」時間を減らすことが鍵だ。そうすれば収入は減るので、あれこれ買わないよう、物をもととしないようにすればいい。お金を稼ごうとせず、貧乏暮らしでいいと思えば、「あれをしなくて、これをしなくて」という義務感がなくなり、計画に圧迫されなくなる。のんびり、ゆっくり、日向ぼっこ、散歩、語り合い、読書、料理作り、花壇作り、休日のペンキ塗りなどができる。消費オンリーでなく、自分の体を使って生きられる。エネルギーを非暴力主義のアートに向けられる。

「質素に生きる」ということは、単に「買うものの量の少なさ」というだけのこと

ではない。「野心・野望をもつこと」<sup>23)</sup>、「有名とか地位が高いとか権力持ちといった，“なにものか”になろうとすること」自体を見直すということだ。言い換えれば「ちやほやされるのはヤバイ」という感じだ。

これは、ええカッコを言ってるのではない。僕自身も、誉められたり好かれたりするのが好きだ。でも、「先生」とか「いい人だ」とか言われることのヤバサを感じている。そんなに表面でみては、他の人も浅くみてるんじゃないかという気がある。僕の矛盾や複雑さやだめさを込みで、過剰じゃなく適切に、少し好きになってほしいと願っている。そして誰かをあまり持ち上げたり先生扱い・特別扱いしない方がいいと思う。民主的と言うのはそういうことではないか。

過剰な理想像を作り上げ、その薄っぺらさに乗るのがいやなんだ。だから、肩書きとか収入とか、そういう権力的なものを脱ぎ捨てたいという直感がある。「ワイルドサイドを歩け」という言葉を抱えてきたのは、そういう感じでおもってきたからだ。フェミとかエコロジストであるとか人権派・左翼的というのは、そういう反体制的でワイルドなものはずだった。大学の講義の内容も、とても破壊的でラジカルなつもりだった。

でも、現実はずしもそうではないということがある。運動でも思想でも教育でも、古い近代主義的な面が残存しており、ある種、体制内の「予定調和的な反体制役割」にとどまっているということがある。それは退屈だ。アナーキーじゃない。ワイルドサイドを歩いていない。創造的破壊じゃない。そういう意味で、「ちやほやされる地位や“なにものか”であること」自体をやめるのが、目指したい「質素な生活」だ。

(次号へ続く)

---

23) 「野心・野望」などというと、まずは否定的に語られやすいが、実は今の時代の風潮は、「そのほうが正直じゃん」というものだ。不況の世の中、能力主義、がんばり、金儲けに必死ということは、「正直でいいこと」とみなされている。うわべのきれいごとに対抗するものとして、人々に見えやすいのが、「金や野心やスケベ」である。

## 文 献

- 伊田広行[1997]『樹木の時間——もう鼻血もでねえ』啓文社  
 ——[1999]「スピリチュアル・シングル——生き方と新しい社会運動の新しい原理を  
 求めて——」『大阪経大論集』50巻第1-3号  
 ——[2002]「新しい人権へ」『大阪経大論集』53巻第2号  
 ——[2003a]「〈ぎりぎり〉の実践へ——自分の振り返りと現在とこれから」『大阪  
 経大論集』53巻第5号  
 ——[2003b]「新しい社会運動の模索——〈スピ・シン主義〉視点からの考察」『大  
 阪経大論集』53巻第5号  
 ——[2003c]『〈スピリチュアル・シングル主義〉』（仮題；明石書店2003年春出版予  
 定）
- ル＝グウィン[1973]『さいはての島へ ゲド戦記Ⅲ』岩波書店（The Farthest Shore）  
 ——[1978]『闇の左手』ハヤカワ文庫（The Left Hand Of Darkness' 1969）  
 ——[1986]『所有せざる人々』ハヤカワ文庫（The Dispossessed' 1974）  
 ——[1992]『夜の言葉：ファンタジー・SF論』岩波書店（85年サンリオ社版の改訂  
 版）（The Language of The Night, 1979, 1989）
- ピクマル，ミシェル編[1996]『インディアンの言葉』中沢新一訳，紀伊国屋書店（Michel  
 Piquemal, Paroles Indiennes）
- サン＝テグジュペリ[1953]『星の王子さま』（内藤濯訳）岩波書店（Antoine de Saint-  
 Exupéry, LE PETIT PRINCE' 1946）
- 若桑みどり[1988]『レット・イット・ビー』主婦の友社
- ウォール，スティーブ&ハービー・アーデン[1997]『ネイティブ・アメリカン：叡智の守  
 りびと』舟木アデルみさ訳，築地書館（Steve Wall and Harvey Arden, Wisdom Keepers  
 ——Meetings with Native American Spiritual Elders, 1990）